



国際交流を切り拓く

～ベトナム マリーキュリー高校との 交流～

広島工業大学高等学校
教諭 嶋崎 太一

はじめに

広島工業大学高等学校全日制課程の国際交流行事としては、夏休みのニュージーランド語学研修のほか、シンガポールやベトナムからの留学生とのクラブ体験(剣道部・柔道部・弓道部・日本文化部)が行われてきた。しかし平成29年度ごろから本校は、さらなる国際化に向けて、大きく舵を切ることになった。その第一歩として、平成29年9月末には、数年前まで本校に勤務されていた先生が現在教員をしているニュージーランド南島の高校から初の訪問があった。

そして、平成29年10月には、ベトナム(ホーチミン市)のマリーキュリー高校と相互交流に関する覚書に調印し、姉妹校として交流を開始することになった。さっそく、マリーキュリー高校からの留学生及び引率教員が、平成30年6月に来校することが決定した。これまでも本校は、修学旅行(ベトナムコース)の一環として同校を訪問してきたが、関係をさらに発展させ、相互的で緊密な交流をスタートさせることになったのである。

グローバル化の進む今日、国際交流を学校として推進することの重要性は言うまでもない。実際に様々な国と学校交流を行い、交換留学の制度が整っている学校も珍しくない。しかし本校にとっては、留学生を受け入れホームステイを手配するということが初めてのことである。

準備

マリーキュリー高校はホーチミン市の中心部に位置する学校で、生徒数は2,300人を超える大規模校である。

同校は国際交流にも積極的で、フランスにも姉妹校をもっているほか、日本をはじめ諸外国の修学旅行団の訪問を受け入れている。

私は昨年12月頃よりマリーキュリー高校側の担当のSang先生と連絡を取り、具体的な準備に入った。実は私だけではなく、Sang先生にとってもホームステイを手配することは初めての経験であり、手探りのまま二人三脚での準備となった。まさに「暗中模索」というにふさわしい状況だった。

本校としては、ホームステイを受け入れてくださるご家庭が揃うかという点が不安であった。しかしこれについては杞憂に終わり、生徒を通じて多くのご家庭から「協力しても良い」という声をいただき、無事ホームステイについては準備することができた。また、ベトナム側では、留学生を募集した短期間の間に10人を超える参加希望があったという。日本でも、ベトナムでも、生徒たちは我々が考えている以上に世界への意識が高いのだろう。

活動内容

6月23日(土)、ついにマリーキュリー高校より留学生9人と引率のSang先生が来日した。同日、ホストファミリーとなる保護者・生徒も出席して歓迎セレモニーが行われた。歓迎セレモニーでは、本校の英会話部が司会や学校紹介を英語で行い、留学生からは、学校紹介やマジックの披露があった。長旅の疲れも見せず、その日から始まるホームステイに胸を膨らませた留学生たちの表情は印象的である。翌日曜日

はホストファミリーと宮島に行くなどして充実した休日を過ごしたようである。

月曜日から留学生は、授業に出席したほか、剣道・柔道・弓道の武道系クラブの体験や茶道体験も行った。



弓道の体験

ホストブラザー・シスターの所属するクラスを「ホストクラス」として、留学生もそのクラスに入った。教員がセッティングしなくても、生徒同士で自然と会話に花が咲く。英語と日本語とベトナム語が入り混じる不思議な空間となった。



休み時間の様子

最終日の昼休みに、留学生たちは伝統衣装アオザイを着て、中庭でダンスを披露してくれた。そのときには、本校の生徒がベランダや窓から顔を出し、まさに学校全体から喝采を浴びることになった。留学生にとっては忘れられない経験となっただろう。



留学生による、息の合ったダンス

成果

このプログラムを通して、誰よりも貴重な経験ができたのは、もちろん留学生たちとそのホストブラザー・シスターである。彼らにとって、共に過ごした一週間は毎日がかげがえのない経験の連続だったに違いない。また、ホストブラザー・シスターだけでなく、一緒に授業を受けたりお弁当を食べたりしたホストクラスの生徒たちも、言語の壁を努力と笑顔で乗り越えた経験を共有できたようである。自発的にかかわってくれる生徒が予想以上に多かったことに、私は頼もしさを感じた。

(生徒の感想)

とにかく、楽しかったという言葉に尽きる。貴重な体験だったし、留学生が来てくれたことで、久しぶりに家族で出掛けることもできた。(1年生男子)

日本においてなかなか異文化に触れる機会がないので、家族共々楽しい時間を過ごせました。英語が苦手であり好きではなかったのですが、英語をより身近に感じられるようになりました。外国

に友達ができたと、とても良かったと思っています。(2年生女子)

ホストファミリーとなったことで、家族とのコミュニケーションも増えたという声は多かった。そして、「来たのが日本語をほとんど話せない子だったのが逆に良かった」という声もあったのには、良い意味で驚いた。

その後

10月の修学旅行(ベトナムコース)では、本校の生徒26人がマリーキュリー高校を訪問した。6月に留学生たちと接する機会を設けていたこともあり、今回の訪問は、お互いに「再会」でもあった。

そして、毎年実施しているホームビジットの訪問先となったのは、ほとんどが6月に来校した留学生たちの家庭であった。再会を心から喜ぶ姿もあり、外から見ても感慨深いものであった。

今回のホームビジットを通して、完全ではないものの、「交換留学」に近い形ができたように思う。



修学旅行で訪れたベトナムにて

修学旅行ではベトナム戦争の史跡、資料館を訪れる機会であった。その時の生徒の表情は、6月に平和記念資料館を訪れ、悲惨さに思いをいたして涙を流しそうになる留学生たちと重なるものがあった。国際交流とは、最高の平和教育でもあるのかもしれない、と感じた瞬間だった。

今後に向けて

ベトナム人にとっても、英語は母国語ではない。当初、私にはそのことが不安材料であった。しかし、両国の生徒たちが、時には互いに英語を言い直したりしながらも、笑顔でコミュニケーションをとっている姿を見て、逆に私は、そこに一つの可能性を見出すことになった。ネイティブの英語を聴く機会ももちろん大切である。だが、ネイティブでない二人が互いに手探りで関係を切り拓いていくのも、母国語が英語ではない国同士の学校交流の醍醐味かもしれない。

本校の国際交流はまだまだ始まったばかりであり、課題も多い。交流を重ねる中で、将来的な在り方を模索する段階である。そして、個々の交流を単なるイベントで終わらせないよう、事前、事後指導も含めて計画的な国際教育プログラムを構築していかなければならないように思う。